平 野 遺 跡 1

～ 第２次調査 ～

大野城市文化財調査報告書　第206集

２０２３

大 野 城 市

平野（ひらの）遺跡 1

～ 第２次調査 ～

大野城市文化財調査報告書　第206集

２０２３

大　野　城　市

序　文

大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

平野遺跡は、市域の南部に位置し、これまで２回にわたる発掘調査が行われ、奈良時代から室町時代にかけての集落跡が見つかりました。

今回報告する調査地では、主に鎌倉時代から室町時代の遺構が見つかりました。柱を据えたと考えられる穴を多数確認し、当時の暮らしを伝える遺物が出土しました。また、注目されるのは須恵器甕の中に蓋杯を埋納した遺構です。今回の調査は、大野城市南部における歴史を復元する上で重要な成果となりました。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導を賜りました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和５年３月 31 日

大野城心のふるさと館

館長　赤司　善彦

例言

1．本書は、大野城市大字牛頸 1356 番２・７で計画される宅地開発に伴う事前の発掘調査として実施した平野遺跡第２次調査の発掘調査報告書である。
2．調査は大野城市教育委員会が主体となり、篠原一幸氏の委託を受け実施した。
3．発掘調査は齋藤明日香が担当した。
4．遺構実測及び地形測量は、齋藤、澤田康夫、山元瞭平が行った。
5．遺構写真は齋藤が撮影した。
6．遺物写真は㈱写測エンジニアリングに委託し、牛嶋茂が撮影した。
7．遺物実測は小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江が行った。
8．遺物拓本は小畑、篠田が行った。
9．遺構図製図・遺物図製図は齋藤、小嶋が行った。
10．本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
11．本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
12．文中、陶磁器の分類は特に記述しない限り、太宰府編年（『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』）に依った。
13．本書の第１図は、国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の１地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
14．本書に掲載の出土遺物・実測図・写真は、大野城市が保管・管理している。
15．本書の執筆・編集は齋藤が行った。
16．執筆に関しては、次の方々の協力を得た（敬称略・五十音順）。
大庭康時　　田中克子　　常松幹雄

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに
　1．調査に至る経緯……1
　2．調査組織……1
Ⅱ．位置と環境
　1．地理的環境……3
　2．歴史的環境……3
Ⅲ．調査の成果
　1．調査の概要……6
　2．遺構……6
　3．出土遺物……11
Ⅳ．総括
　1．遺跡の位置づけ……18
　2．須恵器埋納遺構の位置づけ……18

挿 図 目 次

第1図　周辺遺跡分布図（1/25,000）……5
第2図　調査地点位置図（1/2,000）……7
第3図　遺構配置図（1/100）……8
第4図　調査区南壁面土層実測図（1/60）……9
第5図　SB01 実測図（1/60）……10
第6図　SX01 実測図（1/40）……10
第7図　SX02 実測図（1/5）……11
第8図　SB01・SX01・SK01・SK02 出土遺物実測図（1/3）……12
第9図　SX02 出土遺物実測図（1/3・甕のみ 1/4）……13
第10図　ピット群・遺構検出出土遺物実測図（1/3）……15
第11図　杯G 出土遺跡位置図……20

表 目 次

第1表　遺物観察表①……16
第2表　遺物観察表②……17

図版目次

図版１　（１）Ⅰ区全景（南から）　（２）Ⅱ区全景（西から）
（３）SX01 検出状況（南から）
図版２　（１）SX02 検出状況（東から）（２）SX02 礫除去後（東から）
（３）調査状況（西から）
図版３　出土遺物
図版４　須恵器埋納遺構出土遺物

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

平野遺跡は、大野城市域南部にあたり、牛頸川と平野川によって形成された河岸段丘上に位置している。平成 14(2002)年に第１次調査が実施され、今回報告するのが第２次調査である。

調査地は大字牛頸 1356 番２・1356 番７で、周知の埋蔵文化財包蔵地「平野遺跡」の範囲内にあたる。埋蔵文化財の照会を受け、令和３（2021）年５月 14 日に確認調査を実施したところ、現地表下 150㎝の深さで遺構が確認された。

事業者は当該地に集合住宅を建設する予定であり、建物部分については 12.5 ～ 14 mの杭を打設する計画であった。計画通りに工事が施工されると建物部分に関しては遺構の破壊が確実であるため、発掘調査が必要と判断された。事業者からの計画予定図面を添えて 93 条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和３年５月 25 日付で発掘調査の指示が出された。また、令和３年５月 14 日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。

これを受け、令和３年６月４日から同年７月 29 日にかけて発掘調査を実施した。調査対象面積は 300㎡である。整理作業については、令和４（2022）年度に実施した。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は事業者が負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた篠原一幸氏には記して感謝の意を申し上げたい。

２．調査組織

令和３年度から令和４年度における発掘調査及び整理体制は以下の通りである。

令和３年度（発掘調査）

教育長	吉富　修（～６月）	伊藤　啓二（７月～）
教育部長	日野　和弘	
ふるさと文化財課長	石木　秀啓	
係長	林　潤也	上田　龍児
主査	徳本　洋一	
主任主事	秋穂　敏明	
主任技師	山元　暸平	
技師	齋藤　明日香	
主事	鮫島　由佳	
会計年度任用職員（調査）	澤田　康夫	石川　健（12 月～）
会計年度任用職員（啓発）	山村　智子	深町　美佳
会計年度任用職員（庶務）	三好　りさ	光原　乃里子（～９月）　野上　知則（11 月～）
	山上　敬子	井之口　彩子

令和４年度（整理作業）

市長	井本　宗司
地域創造部長	増山　竜彦
大野城市心のふるさと館館長	赤司　善彦
文化財担当課長	石木　秀啓
係長	林　潤也　　上田　龍児
主査	徳本　洋一
主任主事	秋穂　敏明
主任技師	山元　瞭平
技師	齋藤　明日香
会計年度任用職員（調査）	澤田　康夫　　石川　健
会計年度任用職員（啓発）	山村　智子　　深町　美佳　　照屋　真澄（８月～）
会計年度任用職員（庶務）	清水　康彰　　大塚　健三（７月～）
	山上　敬子　　井之口　彩子

発掘調査作業員（令和３年度）

安倍　五郎　　井上　光江　　金子　伸子　　神原　廣　　凧　一文　　田代　薫
永田　眞知子　松田　紀雄　　見藤　素子　　武藤　マリ子　横野　茂樹

整理作業員

小畑　貴子　　古賀　栄子　　小嶋　のり子　　篠田　千恵子　　白井　典子
津田　りえ　　仲村　美幸　　氷室　優　　松本　友里江

Ⅱ．位置と環境

１．地理的環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域の南側には、牛頸山とそれから派生する低丘陵が広がる。牛頸山は、背振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩に属し、表層は風化が激しい真砂土となっている。牛頸山北麓から北側低丘陵にかけては、御笠川の支流である牛頸川と、牛頸川の支流である平野川の開析作用によって無数の谷がつくられ、堆積作用によって河岸段丘も形成されている。

平野遺跡は市域の南部に位置し、牛頸川と平野川によって形成された河岸段丘上に位置する。

２．歴史的環境

平野遺跡の所在する大野城市南部では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が数多く確認されている。ここでは縄文時代から中世までの時期について、周辺遺跡を概観したい。

縄文時代　本堂遺跡や塚原遺跡群、日ノ浦遺跡などで確認されている。本堂遺跡では、遺構は確認されていないものの縄文時代早期の撚糸文土器や押型文土器が出土している。塚原遺跡群では、後期後半から晩期にかけての竪穴住居跡や土坑、日ノ浦遺跡では、後期末から晩期前半の竪穴住居跡や土坑が確認された。

弥生時代　弥生時代に入ると遺跡数は増加し、御笠川や牛頸川流域を中心とする平野部に多くなる。遺跡としては、本堂遺跡、日ノ浦遺跡などがあげられる。本堂遺跡では早期から後期にかけての竪穴住居跡や溝などが確認されている。日ノ浦遺跡では、甕棺墓や土壙墓が検出された。

古墳時代　６世紀以降に遺跡数が増加する。６世紀中頃には、九州最大の須恵器窯跡である牛頸窯跡群の操業が開始される。野添遺跡群と本堂遺跡において、牛頸窯跡群最古相の窯跡が確認されている。６世紀末から７世紀前半になると、窯の基数が大幅に増加し、牛頸窯跡群特有の「多孔式煙道」が登場する。また、小田浦窯跡群や月ノ浦遺跡では、瓦陶兼業窯が確認されており、生産した瓦は那津官家と想定される福岡市那珂遺跡群へ供給されている。集落としては、上園遺跡や塚原遺跡群などがあげられる。上園遺跡では、後期の竪穴住居跡や掘立柱建物、ロクロピットなどが確認された。焼歪んだ須恵器や粘土塊なども出土することから、須恵器工人集落と考えられている。塚原遺跡群では、後期の竪穴住居跡や掘立柱建物が確認されている。土師器に比べて須恵器の出土量が多く、住居跡からは器形や調整は土師器の手法を用いるが、焼成は須恵器のように青灰色になる甕や甑が出土している。このことから、須恵器生産に関わっていた人々の集落と考えられている。古墳としては、後田古墳群、小田浦古墳群、塚原古墳群などがあげられる。後田古墳群は後期から終末期にかけて、築造・追葬が行われ、小田浦古墳群は後期に築造された。両古墳群から窯を掘るための道具である鉄製Ｕ字型鋤先が出土しており、被葬者は須恵器工人であったと推測される。塚原古墳群は中期末から後期にかけて築造され、出土遺物として鉄刀や鉄鏃などの武器類、鎌・鋤先などの農具類、ガラス小玉や管玉、

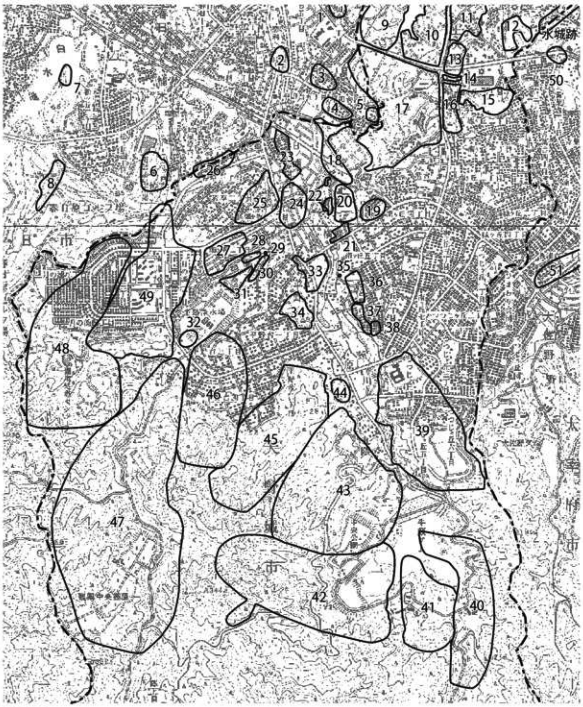
銅釧などの装身具が出土した。さらに梅頭遺跡第１次調査１号窯では、窯の操業後に鉄刀や鉄鏃、耳環などを副葬し、墓として転用した事例も確認されている。

７世紀前半から中ごろになると、窯の数が減少する。この時期に「直立煙道窯」が登場し、多孔式煙道に代わり主流となる。

奈良時代　牛頸窯跡群は最盛期を迎え、最も多くの窯が操業される。ハセムシ窯跡群や井手窯跡群では、大小の窯を使い分けており、大型の窯では大甕、小型の窯では食器類の生産が行われたようである。ハセムシ窯跡群から出土したヘラ書き須恵器には、甕を調として納めた旨が記されており、当時の税制の実態を示す重要な資料である。当該期の集落としては、本堂遺跡や日ノ浦遺跡などがあげられる。本堂遺跡では、掘立柱建物や竪穴住居跡、溝などが確認されている。円面硯や転用硯、墨書土器などが出土しており、寺が存在していた可能性が指摘されている。日ノ浦遺跡では、竪穴住居跡や廃棄土坑などが確認された。廃棄土坑から一括出土した須恵器は、８世紀から９世紀代の編年資料として良好なものである。

平安時代　遺跡数は減少し、牛頸窯跡群も９世紀中頃に操業を停止する。当該期の遺跡は、上園遺跡や小水城周辺遺跡、本堂遺跡などで確認されている。上園遺跡では、掘立柱建物や井戸、溝などが確認されている。小水城周辺遺跡では、掘立柱建物や土坑、溝などが確認されており、遺構検出面からは八稜鏡が出土している。本堂遺跡では９世紀代の遺構は確認されず、10 世紀以降に遺構が増加し、掘立柱建物や竪穴住居跡、溝などが確認されている。また、谷部からは墨書土器や呪符木簡など、祭祀遺物が多く出土している。

鎌倉～戦国時代　御笠の森遺跡や薬師の森遺跡といった市域北部で当該期の遺跡は多く確認されているが、南部での遺跡数は少ない。遺跡としては、本堂遺跡や平野遺跡があげられる。本堂遺跡では遺構は確認されているが、平安時代ほどの盛行はみられない。平野遺跡では、掘立柱建物や竪穴状遺構などが確認された。陶磁器や土師器が出土し、特に土師器の小皿が数多く出土した。なお、牛頸不動城は戦国時代の山城であるが、未調査のため詳細は不明である。



【春日市】

1．平田北遺跡　2．円入遺跡　3．春日平田遺跡　4．春日平田西遺跡　5．春日平田東遺跡　6．浦ノ原窯跡群
7．白水池古墳群　8．イゲ谷古墳群

【大野城市】

9．梅頃遺跡群　10．本堂遺跡　11．上園遺跡　12．矢倉遺跡　13．小水城岡辺遺跡　14．上大利小水城跡
15．谷蟹遺跡群　16．野添遺跡　17．野添窯跡群　18．花無尾遺跡　19．平田Ⅰ・２号窯跡　20．横峰Ⅰ遺跡
21．横峰Ⅱ遺跡　22．屏風田遺跡　23．日ノ浦遺跡　24．塚原遺跡群　25．畑ケ坂遺跡　26．下野原遺跡
27．月ノ浦遺跡　28．正楽寺跡　29．胴ノ元古墳　30．胴ノ元窯跡　31．胴ノ元遺跡　32．大行事遺跡
33．平野遺跡　34．城ノ山窯跡・不動城跡　35．中通古墳　36．中通遺跡　37．中通古墳群
38．中通窯跡群　39．ハセムシ窯跡群　40．長者原遺跡群　41．笠原遺跡群　42．足洗川遺跡群　43．井手遺跡群
44．原窯跡　45．原浦遺跡群　46．大谷遺跡群　47．石坂窯跡群　48．後田遺跡群　49．小田浦遺跡群

【太宰府市】

50．神ノ前遺跡　51．宮ノ本遺跡

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ．調査の成果

１．調査の概要

平野遺跡は、牛頸川と平野川によって形成された河岸段丘上に位置する。これまで一次調査を実施し、奈良時代から中世にかけての集落跡を確認した。

調査対象地は標高 48 m前後の平坦な土地で、調査前は宅地として利用されていた。調査期間は令和３（2021）年６月４日から同年７月 29 日までで、調査面積は開発面積 1,040㎡のうち 300㎡である。調査区内に排土を置く必要があったため、調査は２回に分けて実施し、西半部をⅠ区、東半部をⅡ区とした。

遺構面は、客土（150 ～ 180㎝）を除去した後確認した。砂質土を基本とし、部分的に粘質土の堆積が認められる。調査では、建物跡や竪穴状遺構、須恵器埋納遺構、ピット群などを確認した。遺構の多くは調査区Ⅰ区に集中している。須恵器、土師器、陶磁器などが出土し、鎌倉時代から室町時代の集落の一部であることが明らかとなった。

２．遺構

（１）掘立柱建物跡

SB01（第５図）

調査区中央部で検出した。グリ石を礎盤とした柱穴が複数見つかり、それぞれを結ぶ建物として確認できた。南北２間（4.2m）×東西２間（3.2m）の建物である。各柱穴は直径 30 ～ 60㎝の円形を呈し、遺構面からの深さは 10 ～ 50㎝を測る。

埋土からは土師器が出土した。

他にも同時期の土器片が出土するピットやグリ石を礎盤とするピットを検出したが、建物として把握できなかった。

（２）竪穴状遺構

SX01（第６図、図版１）

調査区西端で検出した。東西方向の長さは 2.2m 以上、南北方向の長さは 2.6m、遺構面からの深さは 26㎝を測る。平面形は方形で、北側の壁面はやや直立気味に立ち上がる。中央部には灰が５㎝前後堆積しており、小礫や土師器などが含まれていた。床面は被熱した様子もないことから、廃棄場所のような性格をもっていたものと考えられる。

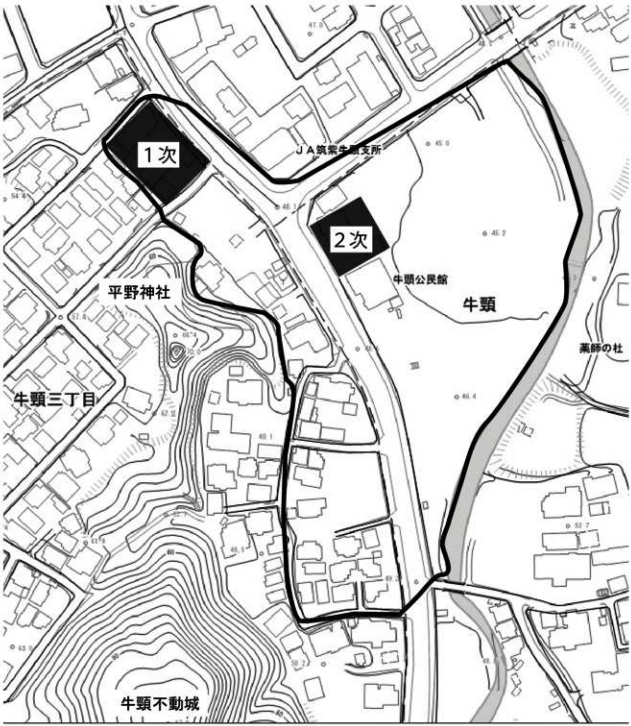
埋土からは土師器や須恵器が出土した。

（３）須恵器埋納遺構

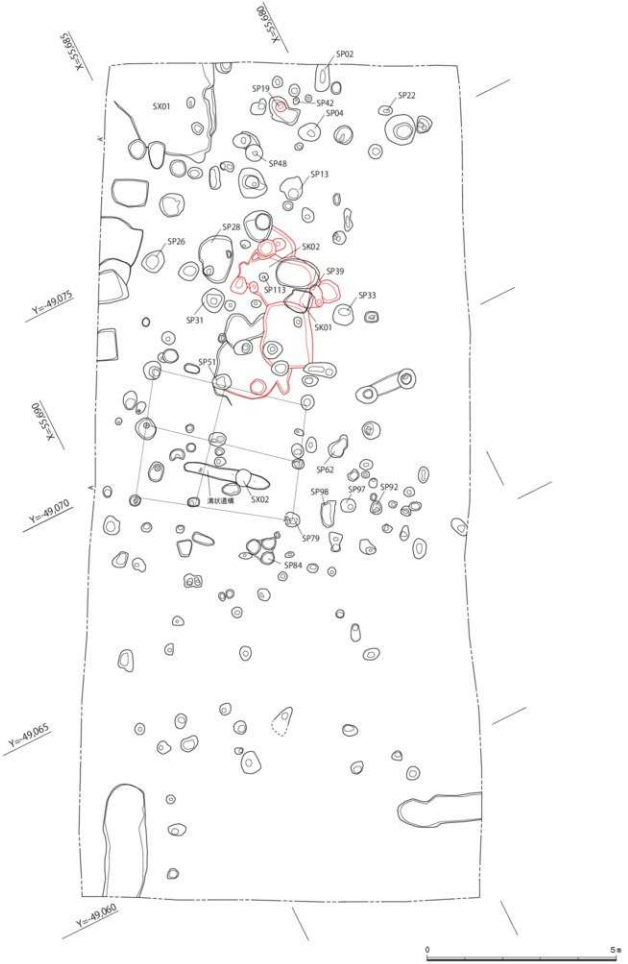
SX02（第７図、図版２）

調査区中央部で検出した。東西方向の長さは 40㎝、南北方向の長さは 45㎝の楕円形を呈するもので、須恵器甕の中に須恵器の蓋杯と小礫が納められた状態で出土した。掘り方の大きさと埋設された須恵器甕の大きさが近い点から、土器埋設を目的として掘削された遺構である可能性が高い。溝状遺構を切るが、詳細な関係性は不明である。

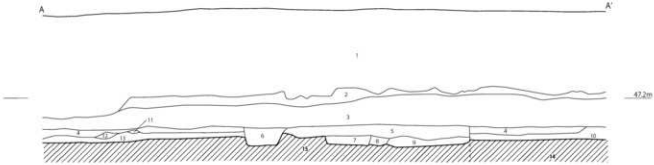
須恵器甕内の出土状況は、小礫の下に須恵器蓋杯が納められている状態であった。残存する小礫の重量は 1,150 g である。なお、須恵器蓋杯はいずれも杯 G で、すべてに「#」のヘラ記号を刻む。



第２図　調査地点位置図（1/2,000）



第３図　遺構配置図（1/100）



1. 耕作土
2. 床土（7.5YR4/1） しまりややあり
3. 褐色砂質土（7.5YR4/3） しまりややあり 0.5～2㎜程の砂粒を多く含む
4. 褐色粘質土（10YR4/4） しまりあり 鉄分ブロックを少量含む 粘性やや強い
5. 褐色粘質土（10YR4/4） しまりややあり 鉄分ブロックを多く含む
6. 褐色粘質土（7.5YR4/3） しまりややあり 5㎜前後の鉄分ブロックを多く含む 粘性やや強い
7. 黒褐色粘質土（7.5YR3/2） しまりややあり 鉄分ブロックや炭などがまざる 粘性やや強い
8. 褐色粘質土（7.5YR4/4） しまりややあり 粘質弱い
9. 暗褐色粘質土（7.5YR3/3） しまりあり 鉄分ブロックや炭がやや多くまざる 粘性強い
10. 褐色砂質土（10YR4/6） しまりややあり 鉄分ブロックをやや多く含む 1㎜前後の砂粒を含む
11. 褐色砂質土（7.5YR4/3） しまり弱い 1～2㎜前後の砂粒を多く含む
12. にぶい褐色砂質土（7.5YR5/3） しまり弱い 2～5㎜前後の砂粒を多く含む
13. にぶい赤褐色粘質土（5YR4/4） しまりややあり 細かい鉄分ブロックを含む 粘性強い
14. にぶい褐色砂質土（7.5YR5/3） しまりややあり 2㎜前後の砂粒多く含む 地山
15. 黄褐色土（10YR5/6） しまり弱い 地山

0 2m

第４図　調査区南壁面土層実測図（1/60）

（４）性格不明土坑（第３図）

主に調査区Ⅰ区において検出した。SK01・02を検出した周辺は遺構が集中しており、本調査地で唯一遺構面を２面確認した場所である。

SK01

調査区中央部で検出した。長さ 50㎝、幅 80㎝、深さ 14㎝を測る不整形土坑である。

埋土からは土師器、青磁、鉄製品などが出土した。

SK02

調査区中央部で検出した。長さ 140㎝以上、幅 180㎝を測り、楕円形を呈する。

埋土からは土師器が出土した。

（５）ピット群（第３図）

主に調査区Ⅰ区において、比較的集中して検出された。柱穴痕と考えられるピットも多数見受けられたが、建物の復元はできなかった。Ⅱ区で検出されたピットの多くは、木の根による攪乱であった。

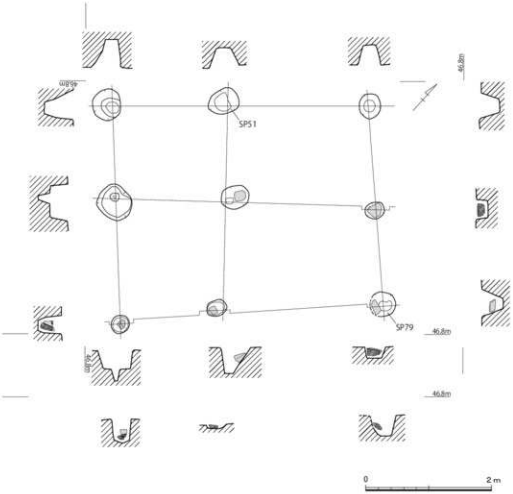
SP02 は調査区西端で検出した。長さ 70㎝以上、幅 30㎝、深さ 30㎝を測り、楕円形を呈する。

SP02　埋土からは青白磁や青磁が出土した。特に青白磁は景徳鎮窯産と思われる製品である。

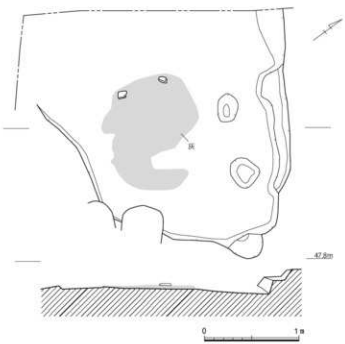
その他のピットからは、土師器や陶磁器などが出土した。

（６）溝跡

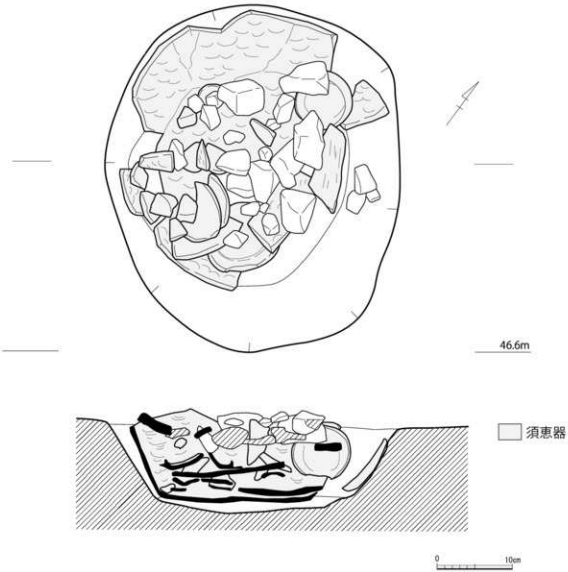
調査区東側で２条の溝を検出した。いずれも調査区外へ続くものである。出土遺物がなく、詳細は不明である。



第５図　SB01 実測図（1/60）



第６図　SX01 実測図（1/40）



第７図　SX02 実測図（1/5）

３．出土遺物

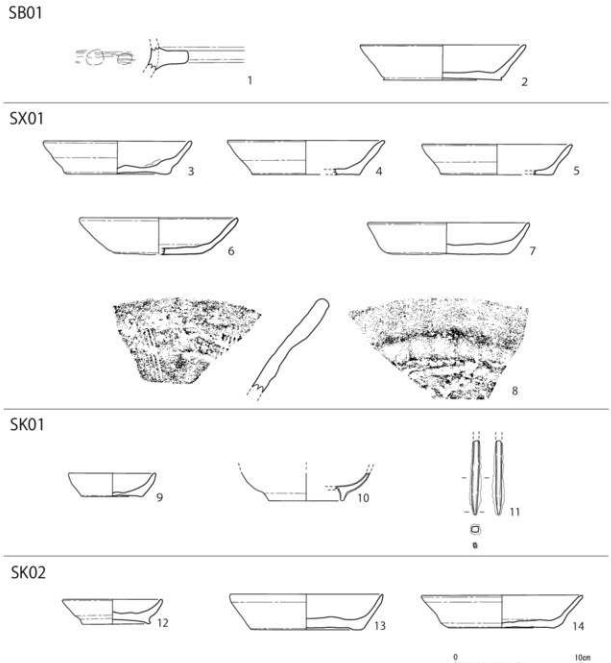
SB01（第８図）

土師質土器（１）　１は羽釜で SP51 から出土した。胴部鍔部分のみ残存する。外面はハケメ、ナデ調整。内面はハケメ調整後に指でおさえた痕跡が残り、胴部の調整終了後に鍔と接合したため残ったもの。

土師器（２）　２は杯で、復元口径 13.0㎝を測る。直線的に外方へ開く口縁部である。外底は糸切り。

SX01（第８図）

土師器（３～８）　３～７は杯である。復元口径 11.8 ～ 12.9㎝を測る。いずれも底部糸切りで４以外には板状圧痕が残る。３、４、６、７は、直線的に外方へ開口する口縁部で、４は口縁端部がやや外反するもので、他は丸くおさめる。５の口縁部は中位で広がり、端部は短く内



第８図　SB01・SX01・SK01・SK02 出土遺物実測図（1/3）

湾する。８は擂鉢。口縁部から体部上半にかけての部分が出土した。直線的に開口し、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに摩滅が著しいが、外面体部中央には指頭痕が確認できる。また、内面には５条１単位の擂目が施される。

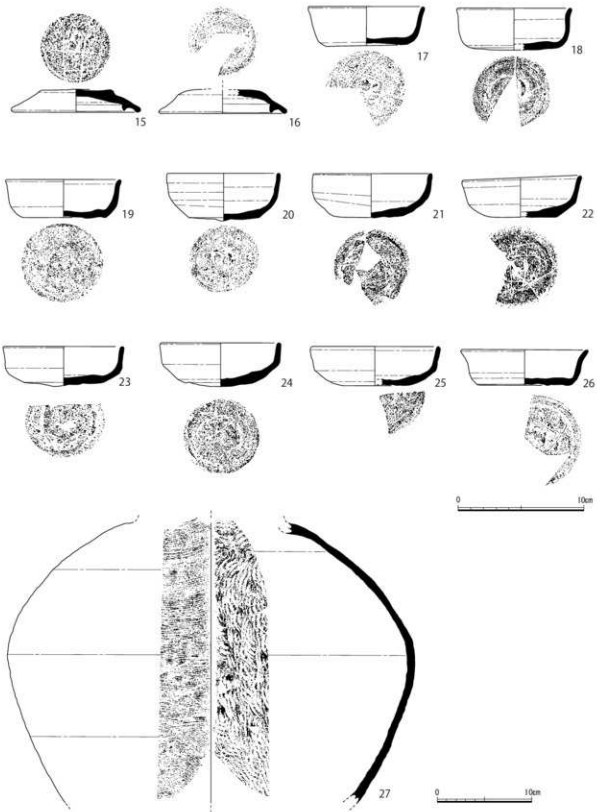
SK01（第８図）

土師器（９）　９は小皿。復元口径 7.0cmを測る。底部糸切りで板状圧痕が残る。やや内湾して口縁部にいたる。

陶磁器（10）　10は龍泉窯系青磁椀。底部のみ残存する。高台畳付は露胎。

鉄製品（11）　11は鉄釘。棒状を呈し、断面方形。

SX02



第９図　SX02 出土遺物実測図（1/3・甕のみ 1/4）

SK02（第８図）

土師器(12 ～ 14)　12 は小皿。口径 8.0㎝を測る。底部糸切り。やや内湾して口縁部にいたる。13・14 は杯。いずれも底部糸切り。13 の口径は 12.2㎝を測る。体部が直線的に外方へ開く。14 の口径は 12.8㎝を測る。底部から体部にかけてやや外反するものの、口縁部までは直線的に外方へ開き、口縁端部は丸くおさめる。

SX02（第９図）

須恵器（15 ～ 27）　15 ～ 26 は、いずれも須恵器甕内から出土した一括遺物である。すべての蓋杯に「#」のヘラ記号が刻まれている。一部残存状況が悪く、完全な「#」の形が確認できないものがあるものの、残存している部分に残るヘラ記号と他の蓋杯のヘラ記号の状況から、すべて同じヘラ記号が刻まれているものと判断した。

15・16 は杯 G 蓋。15 は受部径 10.2㎝、口径 7.8㎝、16 は受部径 10.3㎝、口径 7.6㎝を測る。いずれも外面はヘラ切り後未調整で天井部は平たくなるものである。17 ～ 26 は杯 G 身。口径は 9.2 ～ 10.1㎝を測る。いずれも底部ヘラ切り後未調整。17 ～ 19 は、体部が直線的に外方へ開き、口縁端部がやや外反する。断面は台形を呈する。20 ～ 25 は、底部から体部にかけてやや屈曲し、やや丸みを帯びた形を呈する。体部から口縁部までは直線的になり、口縁端部は丸くおさめる。26 は、17 ～ 19 の形と似るが、体部中央で屈曲し、口縁端部が外反する。27 は甕の胴部。外面は横方向のタタキ目、内面は同心円文の当て具痕が残る。体部中央が膨らむもので、器壁は薄い。

ピット群（第 10 図）

土師器（28 ～ 37）　28 ～ 33 は小皿。口径 7.2 ～ 9.2㎝を測る。いずれも底部糸切り。28・32・33 は短く立ち上がる口縁部で、浅い。29 は底部のみ残存するが、同様な形状になると考えられる。30・31 はやや内湾して口縁部にいたる。34 ～ 36 は杯。口径 12.0 ～ 14.1㎝を測る。34・35 はやや外反気味に口縁部にいたる。36 は体部中央に強い回転ナデが施され、屈曲するものである。体部上半からは、やや内湾気味に口縁部にいたる。37 は擂鉢の注口部分。外面には指頭痕が残り、内外面はヨコナデで仕上げる。

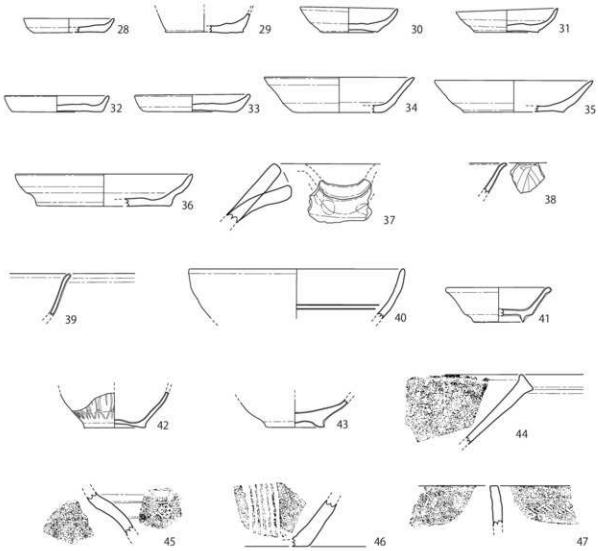
陶磁器（38 ～ 43）　38・39・41 は龍泉窯系の青磁。38・39 は椀。口縁部の破片資料である。いずれも内湾気味に立ち上がる口縁部は、端部を緩く外反させる。38 には鎬連弁文が施される。41 は杯。体部下位をく字状に屈曲させ、ほぼ直線的に外方に立ち上がり、口縁部は外反する。杯Ⅲ類 - 1 a に属する。40 は高麗青磁の椀。口縁部の破片資料である。内面に白色土の象嵌を施す。42 は景徳鎮窯産の青白磁で小型の壺。鎬連弁文を陽刻で表現するもので、型造りである。底部は碁笥底。43 は陶器皿の底部破片資料。内外面に目跡が残る。

土師質土器（44 ～ 46）　44 はこね鉢。口縁端部を上方へ突き出す。45 は壺。肩部の破片資料である。外面にスタンプによる花文を施す。46 は擂鉢。底部から体部にかけては、直線的に外方へ開く。内面には 6 条 1 単位の擂目が施される。

瓦質土器（47）　47 は茶釜。口縁部の破片資料である。口縁部外面に凸文を施す。

石製品（48）　48 は赤間石製の硯である。残存状況が悪く詳細は不明だが、薄く墨が残る。

ピット群



遺構検出

第 10 図　ピット群・遺構検出出土遺物実測図（1/3）

遺構検出（第 10 図）

土師器（49・50） 49・50 は小皿。口径 7.4 ～ 8.2cm を測る。いずれも底部糸切り。49 はやや内湾して口縁部にいたる。50 は内湾してやや直立気味の口縁部を持つ。

陶磁器（51 ～ 55） 51・53 は白磁椀。51 は口縁部を折り返して玉縁とするもの。椀Ⅳ類に属す。53 の高台は内部の刳りが浅くなるもので、椀Ⅳ類に属す。52 は皿。体部は若干内湾気味で口縁部に向かって薄く引き上げている。皿Ⅶ類に属す。54・55 は龍泉窯系の青磁。54 は椀。外面に鎬連弁文を施す。椀Ⅱ類。55 は小椀。外面に連弁文を施す。

第 1 表　遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径 ②器高 ③底径 ④高台径 ⑤最大径幅(腹元端)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土　B:焼成　C:色調	備考
1	土師質土器	羽釜	SK01 (SP51)	②(1.85)	外面ハケメ後ナデ　内面ハケメ	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む　B:良好 C:内N5/N3/1 黒褐色	
2	土師器	杯	SK01 (SP70)	①(13.0)　②2.8　③9.4	底部外面糸切り　粗ヨコ転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒,雲母を含む B:良好 C:内7.5YR6/3 浅黄橙色	
3	土師器	杯	SK01	①(11.8)　②2.6　③(8.4)	底部外面糸切り　底部内面ナデ　粗ヨコ転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒,雲母を含む　B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄橙色～10YR6/1 褐灰色 外10YR7/2 にぶい黄橙色	内面黑変
4	土師器	杯	SK01	①(12.5)　②2.7　③(8.7)	底部外面糸切り　底部内面ナデ　粗ヨコ転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒,雲母を含む　B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄橙色　外10YR6/2 灰黄褐色	口縁部端部黑変
5	土師器	杯	SK01	①(12.0)　②2.4　③(9.0)	底部外面糸切り　底部内面ナデ　粗ヨコ転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒,雲母を含む　B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄橙色　外7.5YR7/3 にぶい橙色	内面黑変
6	土師器	杯	SK01	①(12.6)　②2.9　③7.2	底部外面糸切り　底部内面ナデ　粗ヨコ転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒,石英を多く含む　B:良好 C:内5YR7/6 橙色～5YR4/6 赤褐色	
7	土師器	杯	SK01	①(12.9)　②2.5　③9.2	底部外面糸切り　底部内面ナデ　粗ヨコ転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒を含む　B:良好 C:内7.5YR7/3 にぶい黄橙	
8	土師器	鍋鉢	SK01	②(7.4)	外面一部指オサエあり　内面5条1単位の横ヨコ転ナデ 粗ヨコ調整不明	A:3mm以下の白色・赤色砂粒を含む　B:良好 C:内N.1/N9/6/3 黒褐色	
9	土師器	小皿	SK01	①(7.0)　②1.85	底部外面糸切り　内面ナデ　外面粗ヨコ転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒,雲母を少量含む　B:良好 C:内5YR7/3 にぶい黄橙色,5YR7/6 橙色	
10	磁器	椀	SK01	②(2.25)　③(6.0)	内外面施釉	A:緻密　B:良好 C:釉2.5GY4/1 暗オリーブ灰色　胎:5Y7/1 灰白色	龍泉窯系青磁
11	鉄製品	刀	SK01	残存長5.95　幅0.5　厚3.4.5 重26.7 g			
12	土師器	小皿	SK02	①8.0　②2.0	底部外面糸切り　底部内面ナデ　粗ヨコ転ナデ	A:5mm以下の白色砂粒,雲母を含む　B:良好 C:内N1/N9/6/3 浅黄橙色	
13	土師器	杯	SK02	①(12.2)　②2.8　③8.7	底部外面糸切り　底部内面不定方向ナデ 粗ヨコ転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒,長石,雲母を含む B:良好 C:内5YR7/2 にぶい黄橙色	
14	土師器	杯	SK02	①(12.8)　②2.55　③8.7	底部外面糸切り　底部内面ナデ　粗ヨコ転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:4mm以下の白色砂粒,石英,雲母を含む B:良好 C:内5YR6/8 浅黄橙色～10YR6/3 にぶい黄橙色	
15	須恵器	杯蓋	SK02	①7.6　②1.8　受部径10.3	天井部外面ヘラ切り未調整　粗ヨコ転ナデ 天井部内面ヘラ記号あり	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む　B:良好 C:内N6/ 灰色　外N7/ 灰白色～N4/ 灰色	
16	須恵器	杯蓋	SK02	①7.8　②1.90　受部径10.2	天井部外面ヘラ切り未調整　粗ヨコ転ナデ 天井部内面ヘラ記号あり	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む　B:良好 C:内N8/ 灰色	
17	須恵器	杯身	SK02	①(9.2)　②3.15　③6.4	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面不定方向ナデ 粗ヨコ転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む　B:良好 C:内N6/ 灰色　外N6/ 灰色～N5/ 暗灰色	
18	須恵器	杯身	SK02	①(9.2)　②3.3　③(7.3)	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面不定方向ナデ 粗ヨコ転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む　B:良好 C:内N7/ 灰白色　外N7/ 灰白色～N5/ 灰色	
19	須恵器	杯身	SK02	①9.2　②3.0　③6.6	底部外面ヘラ切り未調整　底部内面不定方向ナデ 粗ヨコ転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:5mm以下の白色砂粒,2mm以下の黒色砂粒を含む B:良好 C:内N5/ 灰色　外N6/ 灰色～10Y2/1 黑色	
20	須恵器	杯身	SK02	①9.0　②3.8　③5.5	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面不定方向ナデ 体部外面下位回転ヘラ削り　粗ヨコ転ナデ　底部 面ヘラ記号あり	A:1mm以下の黑色砂粒を含む　B:良好 C:内N7/ 灰白色　外N8/ 灰白色～N5/ 灰色	
21	須恵器	杯身	SK02	①9.5　②3.5	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面ナデ　粗ヨコ 転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む　B:良好 C:内N7/ 灰白色～N5/ 灰色	
22	須恵器	杯身	SK02	①9.5　②3.5	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面ナデ　粗ヨコ 転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:4mm以下の白色砂粒を含む　B:良好 C:内N7/ 灰白色～N5/ 暗灰色　外N8/ 灰白色～ N5/ 灰色	
23	須恵器	杯身	SK02	①(9.6)　②3.15	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面不定方向ナデ 粗ヨコ転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む　B:良好 C:内N8/ 灰白色～N5/ 暗灰色	体部内面降灰

第２表　遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径⑥(残)長⑦(残)幅	形態・技法・文様の特徴	A:胎土　B:焼成　C:色調	備考
24	須恵器	杯身	SX02	①9.6　②3.45	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面ナデ　他は回転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:4mm以下の白色砂粒を多く含む　B:良好 C:内N6/ 灰色　外N6/ 灰色～N3/ 暗灰色	
25	須恵器	杯身	SX02	①10.0　②3.1	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面ナデ　他は回転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:3mm以下の白色砂粒、石英、微細な黒色砂粒を含む　B:良好 C:内N7/ 灰白色　外N8/ 灰白色～N5/ 灰色	
26	須恵器	杯身	SX02	①10.1　②2.8　③(7.6)	底部外面ヘラ切り後未調整　底部内面ナデ　他は回転ナデ　底部外面ヘラ記号あり	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む　B:良好 C:内N6/ 灰色　外N7/ 灰色～N4/ 灰色	
27	須恵器	甕	SX02	②(29.7)　③43.0	外面平行叩き　内面同心円文当て具痕	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色砂粒、石英を含む　B:良好　C:内N4/ 灰色　外N8/ 灰白色～N5/ 黒色	外面上位隆帯 内面下位隆帯か
28	土師器	小皿	SP28	①7.2　②1.1　③5.6	底部外面糸切り　底部内面ナデ　他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む　B:良好 C:内5YR7/3 にぶい黄橙色～7.5YR7/6 橙色	
29	土師器	小皿	SP33	①(7.5)　②(1.5)　③(6.2)	底部外面糸切り　底部内面不定方向ナデ　他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、石英を含む　B:良好 C:内N7.5YR8/3 浅黄橙色～10YR6/3 にぶい黄橙色	
30	土師器	小皿	SP48	①7.8　②2.05　③4.7	底部外面糸切り　底部内面ナデ　他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む　B:良好 C:内N7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR2/1 黒色	外面煤付着
31	土師器	小皿	SP04	①8.1　②1.9　③5.1	底部外面糸切り　底部内面ナデ　他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内N7.5YR7/3 にぶい橙色	
32	土師器	小皿	SP08	①(8.4)　②1.3　③7.1	底部外面糸切り　底部内面不定方向ナデ　他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む　B:良好 C:内5YR7/3 にぶい黄橙色	
33	土師器	小皿	SP42	①9.2　②1.4　③7.3	底部外面糸切り　他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む　B:良好 C:内N7.5YR7/3 にぶい橙色	
34	土師器	杯	SP31	①(12.0)　②(2.8)　③(7.0)	底部外面糸切り　底部内面ナデ　他は回転ナデ 内面アテ付痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、3mm以下の赤色砂粒を含む B:良好　C:内10YR8/2 浅黄橙色	
35	土師器	杯	SP19	①(12.6)　②(2.5)　③(7.9)5	底部外面糸切り　底部内面不定方向ナデ　他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む　B:良好 C:内N7.5YR7/4 にぶい橙色	
36	土師器	杯	SP92	①(14.1)　②2.55　③(10.8)	底部外面糸切り　他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む　B:良好 C:内N7.5YR7/3 にぶい黄橙色	
37	土師器	鍋脚	SP84	②(3.0)	内外面ヨコナデ　外面脚部圧痕あり	A:微細な白色・赤色砂粒、雲母を含む　B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄橙色～10YR5/2 灰黄褐色　外10YR7/2 にぶい黄橙色	
38	青磁	椀	SP48	②(2.4)	内外面施釉　外面高盤押文を施す	A:胎良　B:良好　C:釉N5/2 灰オリーブ色　胎土5Y6/1 灰色	龍泉窯系青磁
39	青磁	椀	SP02	②(3.4)	内外面施釉	A:胎良　B:良好　C:釉2.5GY7/1 明オリーブ灰色　胎土5B8/1 灰白色	龍泉窯系青磁
40	高麗青磁	椀	SP97	①(17.2)　②(3.8)	内外面施釉　内面2条の白色土の象嵌を施す	A:胎良　B:良好　C:釉10Y6/2 オリーブ灰色～10Y8/2 灰白色　胎土2.5Y7/2 灰黄色	龍泉窯系青磁 砂金類
41	青磁	杯	SP13	①(8.4)　②2.75　③(4.0)	内外面施釉	A:胎良　B:良好　C:釉5G6/1 明緑灰色　胎土N7/ 灰白色	龍泉窯系青磁 砂金類
42	青白磁	壺	SP02	②(2.8)5　③(4.8)5	内面～体部外面中位施釉　外面隅切文を施す	A:胎良　B:良好　C:釉 淡い青緑灰色　胎土5Y8/1 灰白色	景德鎮窯か
43	陶器	鉢	SP39	②(2.3)　③4.2	内外面施釉　内外面口縁部の	A:中や精良　B:良好　C:胎 2.5Y8/1 灰白色　胎土5YR5/4 にぶい赤褐色	
44	土師質土器	こね鉢	SP62	②(3.5)	外面ナデ　内面ハケメ	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む　B:良好　C:内7.5YR6/4 にぶい橙色、7.5YR3/1 黒褐色	
45	土師質土器	壺	SP39	②(3.5)	外面スタンプ文あり　内面ハケメ	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む　B:良好　C:内7.5YR6/4 にぶい橙色、7.5YR3/2 黒褐色	
46	土師質土器	鍋脚	SP22	②(3.7)	外面不定方向ナデ　内面縦1単位の縦ヨロ	A:3mm以下の白色砂粒を含む　B:良好　C:内N8 10YR6/2 灰黄褐色	
47	瓦質土器	茶釜	SP26	②(3.25)	外面摩文あり　内面ハケメ	A:1mm以下の白色砂粒を含む　B:良好　C:内N8 10YR4/1 褐灰色	
48	石製品	硯	SP113	残存長5.4　残存幅5.3 厚さ2.05			赤銅石製
49	土師器	小皿	遺構検出	①(7.4)　②1.25　③(5.1)	底部外面糸切り　底部内面ナデ　他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む　B:良好 C:内5YR7/2 にぶい黄橙色	
50	土師器	小皿	遺構検出	①(8.2)　②1.9　③(7.0)	底部外面糸切り　底部内面ナデ　他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む　B:良好 C:内7.5YR7/3 にぶい橙色　外7.5R7/4 にぶい橙色	
51	白磁	椀	遺構検出	②(3.25)	内外面施釉	A:胎良　B:良好　C:釉7.5Y7/2 灰白色　胎土7.5YR/1 灰白色	福建製
52	白磁	鉢	遺構検出	①(11.0)　②(2.1)	内外面施釉	A:胎良　B:良好　C:釉10YR8/1 灰白色　胎土2.5YR/1 灰白色	浙江製
53	白磁	椀	遺構検出	②(2.0)	内面施釉	A:胎良　B:良好　C:釉7.5YR/2 灰白色　胎土7.5YR/1 灰白色	福建製
54	青磁	椀	遺構検出	②(3.45)	内外面施釉　外面高盤押文を施す	A:胎良　B:良好　C:釉5Y5/3 灰オリーブ色　胎土10Y6/1 灰色	龍泉窯系青磁 梅文類
55	青磁	小椀	遺構検出	①(11.8)　②(3.75)	内外面施釉　外面連押文を施す	A:胎良　B:良好　C:釉7.5GY7/1 明緑灰色　胎土7.5YR/1 灰白色	龍泉窯系青磁

Ⅳ．総括

１．遺跡の位置づけ

（１）各時期の様相

古墳時代以前　当該期の遺構は平野遺跡において確認できていない。

飛鳥時代～平安時代　飛鳥時代の遺構を確認した（SX02）。当該期の遺物が出土した遺構はSX02のみである。また平野遺跡第１次調査地では、奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認されている。

鎌倉時代～室町時代　今回確認した遺構の多くが当該期にあたり、概ね13世紀中頃から14世紀後半に位置づけられる。

（２）集落景観の復元

調査地の周辺に目を向けると、西側には正暦年中（990～994年）に創建されたと伝わる平野神社が位置し、その前面には花無尾（けなしお）・平田道がのびている。この道は西海道や岩戸道といった主要幹線を結ぶ道で、古くから交通の要衝であったと考えられている。また南側には通称「城の山」が位置し、戦国時代に牛頸不動城が築かれた。

平野遺跡第２次調査では、掘立柱建物を１棟確認し、他にもグリ石を礎盤とするピットを多く検出した。今回の調査で復元することのできた建物は１棟だが、周辺には少なくとも数棟の建物が並び集落を形成していたことが想定される。ピットからは土師器や陶磁器が多く出土し、景徳鎮産の青白磁の小壺（42）といった市域では見かけないような遺物も出土した。青白磁の小壺は博多で類例を見ることができ、中世都市「博多」との交流を考えるうえで興味深い。

加えて、須恵器埋納遺構（SX02）といった特殊な遺構が確認され、平野神社の創建前における歴史を復元するうえで興味深い発見となった。また、今回の調査で牛頸不動城成立前にあたる時期の集落跡を確認することができ、牛頸地区の集落の移り変わりを考えるうえで重要な成果であったといえるだろう。

２．須恵器埋納遺構の位置づけ

（１）出土状況と類例

今回の調査では、須恵器甕内に須恵器蓋杯と小礫を埋納した遺構を確認した（SX02）。須恵器蓋杯は、牛頸窯跡群の編年に照らすとⅤ期に位置づけられるものである。須恵器甕は胴部が残存しており、胴部片を受け皿のような用途で使用したものと考えられる。本調査区内では他に須恵器甕の破片は出土しておらず、はじめから甕の胴部片のみを使用した可能性が高い。

須恵器甕内に供膳具を埋納する例はいくつか見られるが、いずれも古墳（羨道・墳丘）からの出土であり（大阪府教育委員会2003、宗像市教育委員会2018）、管見の限り集落遺跡などで単独して出土する例は見つけることができなかった。

（２）ヘラ記号について

甕に埋納されていた蓋杯はいずれも杯Ｇで、蓋が２個、身が10個出土した。特に注目され

るのは、いずれも同じヘラ記号「#」を刻む点である。このヘラ記号を手掛かりに、生産地の特定や生産地と供給地の関係を見出すことができないかの検討を行った。方法として、大野城市内に所在する牛頸窯跡群で生産された杯Gや遺跡から出土した杯Gを集成（1,013点）し、それに加えてヘラ記号を集成した。その結果、#のヘラ記号を刻むものが確認された窯跡は、平田E-1号窯跡のみであった（註1）。現時点で平田窯跡で生産された須恵器が平野遺跡に持ち込まれたと断定することはできないが、ヘラ記号は生産地を特定する鍵となり得る可能性はあると考えられる。ただし膨大な資料数を確認する必要があること、また単純なヘラ記号は多くの窯跡で使用されているため、生産地特定の手がかりとするには不可能なものがある点に注意が必要である。

（3）杯Gの検討

次に大野城市内に所在する遺跡から出土した杯Gについて検討していく。出土した杯Gの個数と遺跡種別（窯跡・墓・集落）ごとに、大野城市の遺跡地図に点を落とし込んだ（第11図）。その結果、杯Gの出土地（生産地である窯跡を除く）の大半が①「生産地である牛頸窯跡群周辺の集落」、②「古墳や土壙墓といった墓」の2つに大別できることがわかった。

集落遺跡での杯Gの出土例は、生産地から離れた場所でいくと仲島遺跡や御笠の森遺跡に認められる程度で、その他では確認されていない。このことから①は、生産地周辺における集落遺跡の特殊な事例として位置づけることができるだろう。今回の調査で確認されたSX02は、周囲に同時期の集落は確認されておらず意図的な埋納を行っている点で、①のなかでも特殊な事例であるといえる。②は集落遺跡と性格が異なり、生産地周辺の墓だけでなく生産地とは離れた市域北部に所在する墓でも数多く出土している。興味深いことに、同じ古墳群のなかでも杯Gが出土するものと出土しないもの、杯Gが多量に出土するものと少量しか出土しないものなど、出土状況は様々であった。

集落遺跡や墓からの杯G出土状況について若干検討してみたが、こうした出土状況の違いは「遺跡の性格差や階層差」を示している可能性が近年指摘されている（長2017）。今後、より詳細な検討を行っていきたい。

註1　報告書によってはヘラ記号有無の記載がないものや、ヘラ記号がある表記があっても詳細が不明なものが多い。今回の集成に関しても同様であり、平田窯跡以外で#のヘラ記号を刻む杯Gを生産していた可能性もあるため、今後調査を進めていきたい。

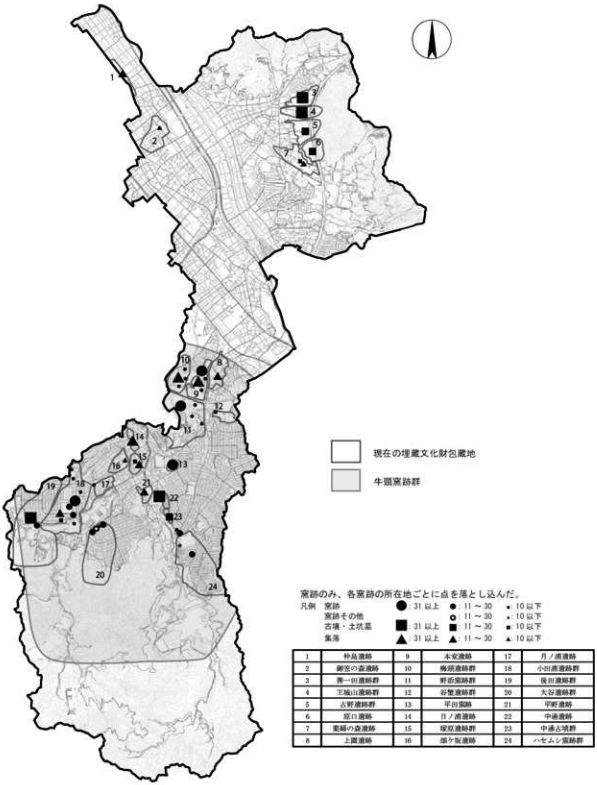
註2　杯Gを集成するにあたり、杯Hや杯Bと迷うものが多数あった。今後杯Gの位置づけを行う必要がある。

参考文献

田子森千子・坂本雄介編　2018『大井下ノ原－福岡県宗像市大井所在遺跡の発掘調査報告－』宗像市文化財調査報告書第75集　宗像市教育委員会

長直信　2017「西海道の土器編年研究」『徹底追求！大宰府と古代山城の誕生』九州国立博物館・熊本県教育委員会

枡本哲　2003『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅱ－中山間地域総合整備事業（南河内こごせ地区）に伴う－』大阪府教育委員会



1	仲島遺跡	9	本家遺跡	17	月ノ渡遺跡
2	御笠の森遺跡	10	梅頭遺跡群	18	小田浦遺跡群
3	岡一田遺跡群	11	野須原遺跡群	19	後田遺跡群
4	王城山遺跡群	12	谷堂遺跡群	20	大谷遺跡群
5	古野遺跡群	13	平田窯跡	21	平野遺跡
6	原口遺跡	14	日ノ浦遺跡	22	中通遺跡
7	鷺巣の森遺跡	15	塚原遺跡群	23	中通古墳群
8	上園遺跡	16	畑ケ坂遺跡	24	ハセムシ窯跡群

第 11 図　杯 G 出土遺跡位置図

図　　版

（１）Ⅰ区全景（南から）

（２）Ⅱ区全景（西から）

（３）SX01 検出状況
（南から）

図版２

（１）SX02 検出状況
（東から）

（２）SX02 礫除去後
（東から）

（３）調査状況
（西から）

3

6

14

28

30

31

33

39

40

42

42

42

図版４

須恵器埋納遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひらのいせき
書　名	平野遺跡１
副書名	第２次調査
巻　次	1
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第206集
編著者名	齋藤明日香
編集機関	大野城市
所在地	〒816-8510　福岡県大野城市曙町2-2-1　　電話 092（501）2211
発行年月日	2023年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平野遺跡（ひらのいせき）	福岡県大野城市（ふくおかけんおおのじょうし） 大字牛頸（おおあざうなくび） 1356番２・７	402192		33° 30′ 4″	130° 28′ 18″	2021年 6月４日 ～ 2021年 7月29日	300㎡	宅地 開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平野遺跡 第２次調査	集落	鎌倉～ 室町	竪穴状遺構 柱穴 須恵器埋納遺構	須恵器・土師器・ 陶磁器	

要　約	平野遺跡は、市域南部にあたり、牛頸川と平野川によって形成された河岸段丘上に位置する。 今回の調査では竪穴状遺構や柱穴をはじめ、12世紀後半から14世紀にかけての遺構を確認した。また須恵器埋納遺構では、甕の中に蓋杯と小礫が納められた状態を確認した。 牛頸周辺の集落の形成時期、不動城の整備時期を考えるうえで重要な成果といえよう。

大野城市文化財調査報告書　第206集

平野遺跡１

令和５年３月31日

発　行　大野城市
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印　刷　山口印刷株式会社
〒848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

平野遺跡 1

大野城市文化財調査報告書 第206集

大野城市